慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エリザベス・アイゼンスタイン著 最初の職業的革命家、フィリッポ・ミッシェル・ブォナロッティ : 伝記的評論
Sub Title	Elizabeth L. Eisenstein ; The first professional revolutionist : Filippo Michele Buonarroti, a biographical essay
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.11 (1959. 11) ,p.989(55)- 993(59)
JaLC DOI	10.14991/001.19591101-0055
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19591101-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歩党の力が弱いため、ビスマルクの圧力によって国民的な統一運動の先頭に立つことができなかったし、労働者階級もまた革命的な政党を欠いていたために、国民的な統一のための闘いのなかで指導権を掌握することができなかった（SS. 70-71）。リープクネヒトとベーベルにとっては、一方においてドイツの国民的統一、他方において労働者階級による革命的政党の結成が焦眉の急務となったのであって、前者は後者の必須の前提であった。労働者階級は絶対主義勢力を打倒し、国民的統一を実現するために、小ブルジョア民主主義者（Kleinbürgerlicher Demokrat）との統一戦線の結成、革命的労働者政党の結成のためのラッサール主義とのたたかいを同時におしすすめながら、しかも小ブルジョア民主主義者との共同闘争の限界を明確に把握しなければならなかった。こうした困難な問題の解決のために、マルクス主義がドイツ労働者階級に浸透する必然性があった。

第五章および第六章においては、英国におけるマルクスおよびエンゲルスの努力による第一インターナショナルの結成を契機とする国際的社会主義運動の発展に呼応して、ブルジョア的な影響を脱却した独立の労働者組織の建設が要求されたのであったが、「全ドイツ労働者協会のセクト（ラッサール主義者）が、ドイツ労働運動に支配的である限りは、ドイツの労働者階級からは、独立の歴史的行動は何物も期待しえなかったのである（SS. 85-90）。一八六六年の初頭、プロシア・オーストリア戦争の危機の深まってゆくなかで、

ビスマルクによるドイツのプロシア化とオーストリアの締め出しに反対する小市民階級の運動が全国的にわきおこり、とくに近代工業の発展したザクセンにおいては、依然として小市民的な意識にとらわれていたとはいえ、労働者がその運動の先頭に立った。三月革命の体験者、革命的民主主義者エッカルト（Ludwig Eckardt）は、ドイツの統一には二つの途がある。「ひとつは、血と鉄による権力の方法によって、侵略慾にもえる支配者による上からの統一であり、他は、下からする人民による統一である」とのべたが（SS. 95-96）、下からの統一のための国民会議が、一八六六年三月二五日および二六日、ドレスデンで開かれた。席上ベーベルは、労働者の共同闘争を宣言し、この大会に関連して、ライプツィヒ、ドレスデン、シェムニッツ、ゲールリッツなどの労働者教育協会の代表者と全ドイツ労働総同盟の指導者がつぎのような決議をしたことは重要である。すなわち、「普通選挙権、民主的な団結および集会の権利、移動の自由、営業の自由、旅行制限の廃止、学制改革の制定、国家による学校の維持、賃金問題、疲病および救済基金の規定」などである（S. 96）。

この運動は、小市民階級の不統一および無気力そしてさらにプロレタリアートにたいする猜疑によって――たとえばリープクネヒトがオーストリアによって買収されていたと考えるような――失敗に終った。ビスマルクの勝利に帰したのである。

第七章以下は、当時のドイツ労働組合運動を支配していたラッサール主義――シュワイツァによって代表される――に対して、マルクスおよびエンゲルスによって指導されたリープクネヒトとベーベルがどのように克服しようとしたか、そして一八六九年、ラッサール主義に対抗して労働者階級による革命的改党社会民主労働党を建設するまでの過程を克明に描いている。その全部にわたって紹介する余裕はないが、本書は要するに黎明期のドイツ労働運動と社会主義運動に関する注目すべき労作である。とくにリープクネヒトおよびベーベルという二人の巨人の動きを通じて、ブルジョア民主主義運動との関係を重視したことは卓見であり、苦悶しつつあったドイツ・ブルジョアジーの国民的統一への熾烈な要求との関連において革命的な労働者階級の運動の発展を把握したことは一層教訓的であろう。しかしその反面、分析的な叙述よりも記述的説明的な部分が多く、やや冗漫に流れる点も目立っている。それからいまひとつ、ラッサール主義に対する評価の問題である。その反動的・小市民的性格を指摘することは絶対に必要であるが、それと同時に、しかもそれにもかかわらず、当時、ラッサール主義が根強くドイツ労働者階級に浸透し、その容易に拭いがたい痕跡を印したのは何故か、つまりラッサール主義にたいする客観的な分析がほとんどみられなかったことは残念である。――一九五九・九・九――

（飯田　鼎）

書評及び紹介

エリザベス・アイゼンスタイン著
『最初の職業的革命家、フィリッポ・ミッシェル・ブォナロッティ――伝記的評論――』
（Elizabeth L. Eisenstein; The First Professional Revolutionist; Filippo Michele Buonarroti, a Biographical Essay, 1959.）

本書は、ハーバート大学出版部から出されている「ハーバート歴史研究叢書」（Harvard Historical Monograph）の一冊である。表題の示すようにフランス革命の渦中に生じた革命的社会主義者ノエル・バブーフ（Noel Babeuf）の協力者、後継者として、同志バブーフの死後、ウィーン会議後のヨーロッパに活躍をつづけ、メッテルニッヒの反動政治のもとに蠢動しつつあった自由主義運動――イタリアにおけるカルボナリ党の運動やドイツのブルシェンシャフトに見られる――に大きな影響をあたえたブォナロッティの生涯をとりあつかったものである。本書の論評に入る前に、フランス社会思想史には全くの門外漢にすぎない筆者が、何故にこの書をとりあげたかという個人的な理由をのべさせていただくならば、それは、このブォナロッティは、筆者のここ数年来の主たる研究対象であったチャーチスト運動のすぐれた指導者ブロンテア・オブライエン（Bronterre O'Brien）に、大きな影響をあたえたことを記憶していたからである。

著者は、その序論のなかで、「先駆者としての議論の余地のない地位にもかかわらず、ブォナロッティはいままで適正な認識をうけたことはなかった」（p. 1）とのべている。すなわち著者は、ブォナロッティにたいして新しい評価を試みることによって、従来の解釈にひとつの修正を加えようと努力している。「フィリップ・ブォナロッティという人物は、『バブーフの陰謀』を研究する人々にとっては、長い間親しみ深いものであった。バブーフおよびダルテとともに、指導者としての彼の役割、そしてとくに事件の歴史家（historian of the affair）としての彼のその後の彼割は……、いかなる研究者にも注意されねばならない。バブーフとの協力関係のためだけで、ブォナロッティを知ることは、十九世紀におけるもっとも重要な生涯のひとつを見失うことになる」（pp. 3-4）。

以上のようにのべて著者は、従来までの「フランス革命――フランス社会主義――バブーフ」の系譜のなかで不当な評価をうけてきたブォナロッティの人物および業績を、新たな意図のもとに再評価しようとしたものである。本書は、一　序論、二　形成期、三　新しい生涯への試み、四　書籍の試み、五　革命家と「モンド」、六　国内における革命家、七　死と変容、の諸章から成り、終りに詳細な参考文献解題が加えられている。第一章の形成期は、一七六一年一一月一一日、イタリアのピサに生まれたブォナロッティが、フランス革命の渦中に、革命家に成長するまでの過程が描かれているが、ここでとくに強調されていることは、フランス啓蒙思想、とりわけルソーの思想のピサ大学の学生であった頃の彼にあたえた影響である（p. 10）。すなわち彼はこのころから、一七七六年アダム・ワイズハウプト（Adam Weishaupt）によって建設された急進的啓蒙団体「イルミナティ（Illuminati）」に加入し、ルソーの「社会契約論」や「人間不平等起源論」などを読んだことは、彼の生涯に決定的な重要性を有するものであった。

ここで著者は、従来、多くの研究者――なかでもマルクス主義者――がブォナロッティの思想形成の上で一大転期となった事件として、重要視するコルシカ島における農民一揆――土地囲い込みの結果としての農民の追放、そして大規模な暴動の勃発――について、そのブォナロッティにたいする影響の過大視を戒めているが、その論証は、必ずしも充分とはいえない。フランス革命の報道をきいてコルシカ島に渡り、フランス入国の機会をねらっている間にその事件を目撃したわけであるが、著者は、彼がコルシカ島へゆかずに直接フランスに行ったとしても、その思想的径路に実質的な変化がみられないということを再三にわたってのべ、とくにルフェーヴル（Georges Lefevre）の解釈を否定している（pp. 14-16）。これは根拠が薄弱であり、いかにも説得力に乏しい憾みがある。

一七九三年五月二七日、フランス国民議会の布告により、フランス市民として認められやがてロベスピェールとも知り合いになったのだが、彼の本格的な活動は、かのテルミドールの反動後にはじまる。

第二章は、一七九四年ロベスピェール派の没落後、革命の進展が次第に反動勢力によっておしとどめられ、やがて一七九九年、いわゆる「ボナパルトのブリュメール十八日」によって革命そのものに終止符がうたれた当時から、一八二三年ナポレオン戦争後の民主主義運動の後退、そしてメッテルニッヒの反動的支配のもとに屈従を強いられていった時期までの間、ブォナロッティが職業的革命家としてどのような組織的活動をおこなったか、とくにバブーフとの関係、イタリア統一運動やオランダにおけるバブーフ主義者の叛乱への参加についてふれている。著者がもっとも力説していることは、一七九六年のバブーフの陰謀とブォナロッティの秘密結社との思想や運動における関連性ではなく――著者はむしろ序論でのべているように、バブーフに関係する限りにおいて、ブォナロッティにふれることに反対している――ブォナロッティ自身の組織や運動のなかにまったく独自のものの存在を主張している。この点は非常に問題であろう。フランス革命末期のバブーフの陰謀は、ルソー、マブリー、モレリーさらにはプラトーの共産主義思想の影響のもとになされたことは事実である。しかしながら、バブーフと同じ共産主義思想から出発したブォナロッティが、バブーフの後継者として運動をつづけながら、その過程において思想的戦術的転換を経験したのは何故であろうか。著者はつぎのようにのべている。

「テルミドール以前の共和国とブォナロッティの当時の世界の間の歴史的な間隙は、ひとつの『偉大な勝利の日』がもはや橋渡しできないほどの深淵にまで大きくなってしまった。救済への正道において、人間性をゆり動かすたった一度の痛打を目的とする陰謀的な組織から、ブォナロッティの戦術的思考は、全人類のために獲得しようと努力していた純化された共同社会を例証する秘密の『教団』の『毛管現象』によって、腐敗した社会の腐蝕を漸次にひきおこす方向に向った」（p. 35）と。この叛乱（insurrection）から秘密教団（secret order）への戦術的、イデオロギー的推移の証拠として著者は、ブォナロッティの秘密組織「至高にして完全なる支配者」（Sublimes Maîtres Parfaits）をあげ、これについて論じている。著者はこの団体をもって、ネオ・ジャコバン主義と反ボナパルト主義との結合であるとする見解を支持し、その運動においてバブーフの共産主義思想の影響を強調すると同時に、ロシアのデカブリストの運動、ドイツのブルシェンシャフトの運動、イタリアにおけるカルボナリ党の運動との関係について、多くの研究者の説を引用し、この秘密結社の性格について論じている。「のちにブランキやバクーニンによって結成された秘密結社のように、それはそれをつくり出し、それを支配した職業的革命家の私的な軍隊であるといえるだろう」（p. 49）。著者はここで、この組織の活動やその意図さらにその機能について、詳細な傍証を試みているが、もっとも根本的な問題ともいうべき大衆との関係について、とくにこの運動を支持した階層の分析や、この運動の背後関係――経済的政治的諸関係についての追究がきわめて不充分であることは遺憾である。大衆とエリ

ートとの関係については、ただ、つぎのような叙述が見られるにすぎない。「ブォナロッティは、より下の段階と最も高い段階との間の、従って宣伝の目的のために必要とされる普通の人々と、イデオロギー的な目標、組織的な体制そして結社の実際の人員について、彼らだけが知っている特別の指導者の間の完全な分離を制度化したのである」(p. 38)。

ブォナロッティは、革命家であっただけでなく、またすぐれた革命思想家でもあった。革命思想家としての彼の地位を不動のものとしたのは、一八二八年にその初版がブリュッセルであらわれた「平等のための陰謀」(Conspiration Pour l'Egalité dite de Babeuf, suivie du Procès auquel elle donna Lieu et des pièces justificatives, etc.) であって、第四章においては、この書の内容の紹介と政治史上における地位が論じられている。これは一八三六年、チャーチスト運動の指導者ブロンテア・オブライエンによって英訳されたほか、その後二〇世紀に至るまでにドイツ、イタリア、ロシアの各国語に翻訳され、いかによく読まれたかは、英国においては一八三六年のオブライエンの英訳書が五万部を売りつくしたことからもうかがうことができる。著者は、この書がヨーロッパ社会主義思想、とくにマルクス主義にあたえた影響について、つぎのようにのべている。「たとえば、平等のための陰謀が一八四四年に、カール・マルクスによって読まれ、しかもマルクスとエンゲルスはモーゼス・ヘスによって翻訳されるはずのドイツ版を発行する計画をたてたという事実は、いろいろのヨーロッパの都市で売られたか、売れなかったかもしれない本の数よりも、はるかに重要であるように思われる」(p. 66)。著者のこの指摘は、まことに正鵠を射ているようである。この書にもられたブォナロッティの思想の歴史的意義について、ハロルド・ラスキ (Harold Laski) が、その著「現代革命の省察」(Reflection on the Revolution of Our Time, 1943) のなかでのべている一文もまた示唆にとんでいる。「カルヴィンを生んだジュネーヴの子ルソーにおいて極めて自然に発露した見解は、およそ人間とは社会制度によって腐敗堕落せしめられてきたものであるという彼の深い確信とともに、ルソーからバブーフ及びその一味の陰謀者たちに伝わった。彼らは、フランスにおける彼らの希望が、悪しき人々によって破壊されるのを見た。したがって彼らは陰謀的独裁こそ人々を否応なしに善に駆り立てる過程であると考えた。バブーフからブォロナッティ及び一九世紀初頭四〇年間にまさに生れ出んとしていた民主主義の諸秘密結社をへて、この観念はマルクスと社会主義運動に伝わった」(笠原訳上巻一〇八頁)。

著者は、第五章および第六章において、一八三〇年から三七年にいたるブォナロッティのフランス国内における運動について、例によって多くの人々の説をかかげて論じている。とくに第五章においては、反動的専制的な政治のもとにあって、かつての革命的な組織「至高にして完全なる支配者」に代わるものとして「モンド」をつくり、彼は表面上は普通選挙を要求する合法的な共和主義運動家と

して現われながら、裏面ではイタリアやベルギーにおける革命的民主主義運動との交渉について、複雑な経緯がのべられている。

著者も自信をもって記しているように、本書はブォナロッティ研究として、英語で書かれた数少ないもののひとつであろう。脚註や巻末にかかげられた参考文献をみれば、著者のフランスおよびイタリアの研究にたいする並々ならぬ理解の程を知ることができよう。だが著者の広い文献的渉猟や博引旁証のなかに、真理探求への若々しい情熱を感じさせるとしても、いささか資料負けの感を抱かせ、引用だけが表面にでて著者独自の見解がともすればうすれがちとなり、そのために、精力的な研究にもかかわらず、叙述に変化が乏しく、迫力に欠けたものにしている。何よりも、副題において、「最初の職業的革命家」と銘うたれているのに心ひかれ、バブーフ→ブォナロッティ→マルクスおよびエンゲルス→レーニンという思想的系譜を主題にして、そのなかでブォナロッティを論じようとするものと、ひそかに期待していた筆者は、本書を読み了って、軽い失望に襲われたことを告白しなければならない。――一九五九・八・二五――

(飯田　鼎)

平田隆夫著

『社会保障』

「社会保障は、最近『時代の寵児』となった観がある。それは国会の壇上で論議され、労働組合の闘争スローガンに掲げられ、また市民講座の開講科目に組入れられている。これに関する著書も、これまで相当多数に上り、専門雑誌や年鑑類すら刊行せられるに至った。しかし専門家の間は別として、一般には、社会保障と云えば、漠然と社会保険や社会福祉を意味するものと考えられている場合が、今なお多いのではないであろうか。」(序)

本書の第一の特長は、「社会保障を、社会保険を含む社会政策や社会事業との関連において考察」(序) しているところである。著者は、まず「資本主義社会は階級社会である」(一四頁) と断定し、資本主義社会を他の社会から区別する根本的特質は、資本家階級と無産者階級の対立が、社会構造の基調をなしているところにある。そして資本主義社会におけるかかる階級対立の事実から、色々の弊害が発生するのであるとせられて、労働問題 (Labour Problem, Arbeiterfrage) がその中心をなしてはいるが、しかしながら他の諸問題、例えば救貧問題、農村問題、中小企業問題、独立労働者問題、国民保健問題、社会教化問題等をも包含していて、貧困、失業、